

大統領 絶体絶命

金融アナリスト
永山卓矢

【追いつめられるトランプ政権】

トランプ大統領が「ロシアゲート」問題で追い込まれている。フリン前大統領補佐官をはじめ、大統領陣営がロシアと関係性を深めていた事象を捜査しようとしていたコミーFBI長官(当時)を大統領が今月9日に解任したが、それ以前からその捜査をやめるように圧力をかけていた事が「司法妨害」に問われる可能性が指摘されている。またロシアのラブロフ外相と会談した際に、機密情報を漏洩した事も報じられている。

連日のように、米政府高官や当局の関係者から内部情報がメディアにリークされている。政府内部に、トランプ大統領やその腹心の偏狭なナショナリスト勢への不信感や不満が鬱積している事があるといわれている。とはいえ、かなりの異常状態に陥っているのは間違いなく、「異端児」であるトランプ大統領が“嵌められている”可能性を考えない訳にはいかない。

その背景には、トランプ政権の成立が欧州のロスチャイルド財閥系と、米国のロックフェラー財閥系による妥協の産物であったという事情がある。この両財閥の“同床異夢”による提携関係が、ここに来て綻びが出て来ている。この事が大統領周辺を巡る政治スキャンダルになって表れているのだといえよう。

【欧米二大財閥の“同床異夢”による提携】

欧州系財閥は米系財閥による世界覇権に対抗するにあたり、当初は「一帯一路」構想を唱えていた中国の習近平国家主席と提携。同国の巨額な外貨準備をその信用基盤にして、ユーラシア大陸に強大な経済圏を構築する事を目指した。そこで、人民元に国際的な信用を得させるため、国際通貨基金(IMF)の特別引き出し権(SDR)の構成通貨への採用を目指した。英国にアジアインフラ投資銀行(AIIB)への出資をさせたのを皮切りに、雪崩を打って他の欧州諸国がこれに追随したのはこのためだ。

ところが、人民元は国際通貨と呼べる代物ではなかった。巨額な外貨準備による信用も、所詮基軸通貨としての米ドルや米国債による信用に裏打ちされていたものに過ぎない存在であった。FRBが量的緩和策の縮小や終了、利上げに向け動くと、資金流出からたびたび信用危機に見舞われてきたのを見ればわかる事だ。

それに加え、中国は人類史上、未曾有の超巨大バブルに見舞われているだけに、簿外で天文学的な債務を抱えている事も明らかになってきた。そこで欧州系財閥は中国と提携する事をひとまず諦め、米系財閥と提携する事にした。それにより、中国に対して資本流出を促して人民元相場を崩落させる一方で、市場開放や特に資本取引の自由化を強要していき、将来的に国有銀行や代表的な国有企業を買収していく戦略に切り替えた。将来的に世界覇権が中国に移る事が見込まれる中で、長期的な観点から米系財閥より優位な地位に立とうとした訳だ。

欧州系財閥がゴールドマン・サックスを介してトランプ政権の擁立に動いたのは、中低所得者層の白人に支持されている偏狭なナショナリスト勢を同政権が抱えている事で、中国に通商問題で圧力を強める上で都合だったからといわれている。また提携関係が成立した時点で、米国は日本とともに人民元のSDRへの採用に賛成の姿勢に転じたものだ。

一方、米系財閥はこれまでグローバル経済を牽引してきた多国籍企業中心の経済構造からの脱却を迫られていた。

中国沿海部で賃金が高騰し、またリーマン・ショック以降、格差の拡大が顕在化して中間層が没落し、米国が世界の「一大需要基地」としての役割を担えなくなってきたからだ。

米企業が全体的に生産性の低下から収益基盤の弱体化に悩まされている中で、大規模な軍需を創出し、軍需関連産業の生産活動を活性化させる事で生産性を引き上げる事を画策していた。

それにより、極東では中国を相手に「新冷戦」構造を構築する。

その一方で、中東ではイランへの攻撃をはじめ「熱戦」を繰り広げようとしている。

そこで米系財閥は昨年の大統領選挙で、当初は民主党系新保守主義(ネオコン)派主導のクリントン元国務長官を支持し、国防費を増額しながら公共インフラ事業を打ち出そうとした。その後、欧州系財閥と提携してトランプ政権の成立に舵を切った事で、共和党系ネオコン派主導でより強力に国防費を増額しながら、公共インフラ事業についてはそのまま踏襲され、さらに減税や規制緩和の推進といった共和党政権の政策がそこに加わる事になった。

【用済みの大統領?】

こうして成立したトランプ政権は、大統領選挙戦中には保護主義的な姿勢や、中国と台湾との間での「一つの中国」に縛られない姿勢を示す事で中国に圧力をかけた。さらに大統領に就任してからは、北朝鮮問題では軍事攻撃も辞さない姿勢を示す事で、中国に対して同国向けの原油の供給の削減や停止を求めた。中国としては北朝鮮の体制崩壊は絶対に受け入れられない事を承知の上でこうした要求を突き付けた訳だ。そうする事で、水面下交渉で市場開放や資本取引の自由化を受け入れるように強要してきた。

4月6～7日の米中首脳会談で米国側の要求を中国側が基本的に受け入れると、それをしっかり実行するのを後押しする上で、トランプ大統領は習主席を“おだて殺し”にする姿勢を見せた。

その結果、今月14～15日に中国・北京で開催された「一帯一路」国際会議の開催に間に合わせて「100日計画」が公表されたのであり、表面的に記載されている項目より実際には中国側は米国側からより強硬な要求を呑まされておかしくない。

表面的な項目だけでも最も重要なのは、中国市場で米金融機関が格付けや電子決済、債券の引き受け業務で参入するのを認めた事である。いうまでもなく、これは将来的に国有銀行や有力な国有企業を次々に買収していく方向への道を切り開くものだ。

所期の目的を達成した事で、欧州系財閥は中国を追い詰めるのではなく、融和的な姿勢への転換を望みつつあるようだ。

中国を内側から“乗っ取った”上で、従来のように「一帯一路」構想に乗ってユーラシア大陸経済圏の構築を目指す方が有利であるからだ。「100日計画」をまとめた上で「一帯一路」構想の重要性を認め、米国もその国際会議に代表団を送ったのはこのためだ。またそれとともに、欧州系財閥にとってトランプ大統領はもはや“用済み”になったといえる。

これに対し、米系財閥は石油資本に連なる軍需産業系を後押しして「新冷戦」体制に持ち込もうとしているだけに、その相手である中国に必要以上に融和的な姿勢を示す事には否定的である。

北朝鮮が依然としてミサイルを発射するなど不穏な動きを続けており、特に国際会議が開催されている最中の14日に撃ち上げたのは、欧州系財閥の意向で必要以上に米国の外交政策が中国に接近するのを牽制するため。これは、容易に推測できる事だ。何故なら、北朝鮮で主導権を握っている朝鮮人民軍は親イスラエル右派や共和党系ネオコン派によって操られているからだ。今後も北朝鮮はミサイル発射や6回目の核実験を強行する姿勢を示し続ける事で、中国や米国内の欧州財閥系の勢力への牽制を継続していくのだろう。

ただし、欧州系財閥としてはトランプ大統領は“用済み”になりつつあるが、米系財閥としても前述のようにもとより積極的に支持していた訳ではない。

極東での「新冷戦」、中東での「熱戦」体制を推進していくにあたり、米政権内部では親イスラエルのネオコン派が主導権を握っていく必要がある。当初から任期途中でこの系譜から出ているペンス副大統領に交代させるつもりでいたのだろう。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

立ちはだかる
97年と00年の壁

日経平均は18日ギャップダウンしたものの、先週は反騰して、19,850まで戻してギャップを埋めた。

先週のコメント「日経平均はここでアイランドリバーサルギャップが発生。トップフォーメーションが形成された。材料としてはインパクトがあったが、一時的なショック安と観ている。近々このギャップ返しが入れば、それが証明されよう」。

結果的にはショック安気味となった。サイクルベースでは5月18日が4～6週サブサイクルボトム。従って現在は再びサイクルの上昇期に入っている。この上値目標値は過去2週間述べた如く変更はない。

即ち「現段階での高値目標値は21,112±340。深押しが入っても、18,840～18,648の最初のギャップアップを週の引け値で埋めない限り強気姿勢を貫く…アイランドリバーサルのギャップを今週中にもギャップ返しで反発して埋めてくれば、2万円は簡単に達成されるだろう。最初の高値目標値は6月中にも達成されるとみる」。

今週は2万円が試されるが、5月16日の1年半ぶりの2万

今週の押し

ユーロ相場2態

どう見ても、現在の通貨市場はユーロが面白い。依然、当欄ではこれにドル円相場も加え「チキンレース」が行われていると表現した。レースは、そろそろ終盤に入っている。

ユーロ円は25日に125.80まで上昇。16日の高値125.81と面合わせ。15日スローストキャスティクスとは弱気オシレーターダイバージェンスになっており、これはWトップと見る。一方ユーロドルは23日に1.1266まで上昇。これも弱気オシレーターダイバージェンスが発生している可能性がある。

仮にこの見立て通りに両市場が下落した場合、ユーロ円は120円付近、ユーロドルは1.09～1.10付近まで下落するのではないかと予測する。

日足を見る限りユーロの基調は対円で弱気、対ドルでは強気である。ユーロドルは上記の値位置まで下落すると買い場到来と考えるが、ひょっとすると、ユーロ円は上記の値位置で維持されずにオーバーシュートするかも知れない。

アストロカレンダー

永井 元

心配事是对話路線という流れになっている。果たして対話はされるのであろうか。それぞれが自国内で対話しているのならば、対外的にも対話される可能性はあろうが、米国は一方的な親分だし、北朝鮮も気に入らない奴は殺処分の実績。どちらも対話する姿勢にそもそも欠けているような印象だ。期待だけさせておいて、対話無しの突如行動なのではないかと心配になる。

日経平均が2万円近くまで戻っているが、ここから2万円を上回って上昇するような材料は見当たらない。

景気が良くなるとか、政策的に何か驚かされる内容が発表されたりすれば別だろうが、今はなんとも言えない状態だ。

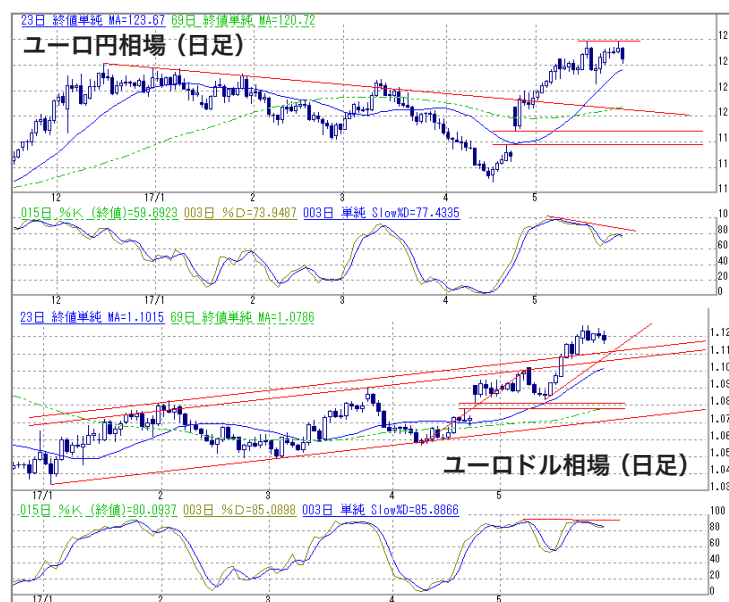
やはり、蝕の時間帯で事件は起きるのであろうか。ちなみに、8月のホロスコープマップは前半の月食で、株式は突っ込みのイメージ。後半の日食では、下落から下げ止まりという感じだ。

為替は日食から円安という構図になっている。投資家は為替と株式双方で利益を上げるであろう。100円割れからドルを買い下がり、90円台前半まで進めば、そこでドテン。ブラックマンデークラスが再来するのであれば、またとない大チャンスである。

一般投資家はババを引かない様に十分注意する必要がある。

何もせず静観より、突っ込んだ瞬間を狙うのが得策であろう。

円テストは一旦阻まれたが、次のチャレンジではこの壁を突破できると観ている。13～19週プライマリーサイクルベースでは今週はまだ6週目。且つ、第2サブサイクル（4～6週）の2週目でもあることから、サイクルの上昇期における時間的な余裕は十分ある。一度突破すれば、目標値までは早いだろう。これが達成されれば、次はいよいよ1996年の高値、22,750円。実に21年ぶりの挑戦になる。ただ、対称形では2015年の高値は2000年の高値と合致しており、さらに1997年もこのレベルで二番天井を付けた。左右対称でこの高値が呼応するようであれば、2015年8月高値への2度目の挑戦は一旦阻まれる恐れがある。20,800～900が次の壁になるかもしれない。



アストロカレンダー 6月 永井 元

天文現象		注目マーケット	天文現象		注目マーケット
1 木	上弦		16 金	海王星逆行開始	
2 金			17 土	下弦	
3 土	金星西方最大離角 月赤道通過	為替・小豆・ゴム	18 日	月赤道通過	為替・小豆・ゴム
4 日			19 月		
5 月			20 火		
6 火			21 水	夏至 水星外合	全マーケット
7 水			22 木		
8 木			23 金	月最近	
9 金	満月 月最遠	全マーケット	24 土	新月 月赤道最北	全マーケット
10 土	木星逆行終了		25 日		
11 日	月赤道最南	穀物	26 月		
12 月			27 火		
13 火			28 水		
14 水			29 木	水星・火星会合	アニバーサルデー
15 木			30 金		

今週の相場風林語録

槿花一日の栄

槿花は、むくげの花。朝咲いて、夕べにしぼむ、はかないものの例え。

今週の九星★波動

南雲 紫蘭

月盤変更前夜

リスクオン、オフがしょっちゅう入れ替わっているように感じるのは、ドル円相場だけを見ているせいなのかもしれません。

実際の相場は、ユーロとポンドといった典型的なリスクオフで売られていた通貨がじりじりと、時には爆発的に、買われている相場といえます。一見リスクオフのほうが多く見えても、イベントを乗り越えているたびに上昇している。それがユーロとポンドなのです。特に、ユーロは年初が最安値であり、結局一度もその安値が割れぬまま上昇を続けているといえます。

歴史的なドル高はゆっくりと反転され、全通貨に対するドル高は明らかに調整されているといえます。

その中で、ドル円相場だけ見ればいかにもレンジ的ではありますが、結局ドルの調整という大枠の中で、過大評価されている通貨が調整されているので、ドル円だけ見るといかにもわかりにくい、ということなのでしょう。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (397)

中原 駿

今にして思えば、1990年代は古典的な長短金利分析が有効に作用した最後の時代であったのかもしれない。

それは、世界経済の構造が、いわゆる第二次世界大戦後の構造であった最後の時代である。

米ソ、共産主義と資本主義という対立構造こそ消えたが、経済における資本主義の独り勝ち構造が変わっておらず、いわゆる先進国だけの経済構造を分析すれば、世界経済の構造がほとんど理解できた最後の時代というわけだ。

もちろん、中国はものすごいスピードで経済成長を遂げていたものの、それでも日本経済の半分にも満たなかった。

中国ですらそれであるから、インドやましてやブラジル、ロシアなどが経済大国に登場することなど夢物語であった。

第六感の ダブルボトム覚悟も強気姿勢



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ユーロ最強変わらず

ドル円相場は5月17日のショック安を取り戻すべき奮闘しているものの、先週は112円台にタッチするのがやっとの状況。世界情勢は依然として不透明、北朝鮮の挑発、テロ、トランプ大統領のロシアゲート疑惑などリスクへの警戒感が強い。まだ安全資産の円が買われる状況は続いているようだ。

しかし、同時にユーロも強く最強通貨であることに変わりはない。先週のユーロ円相場の高値は125.80と17日の急落を取り戻し、16日の年初来高値125.81に顔合わせ。週末はやや売られ、ここまではダブルトップ系になっている。122.50以下で引けない限り、このダブルトップを上抜いてくると観る。中期流れでは4月24日のギャップアップを埋めて引けない限り強気を維持したい。

さて現在、トランプ政権への不透明感がドルを最弱通貨にしている。専門家はトランプ氏を弾劾して、大統領の座から引き下ろすのはかなり難しいとの見方。ただ今後も内部からのリークが行われ、新しい疑惑が次々と出て来るリスクは覚悟しておく必要がありそうだ。

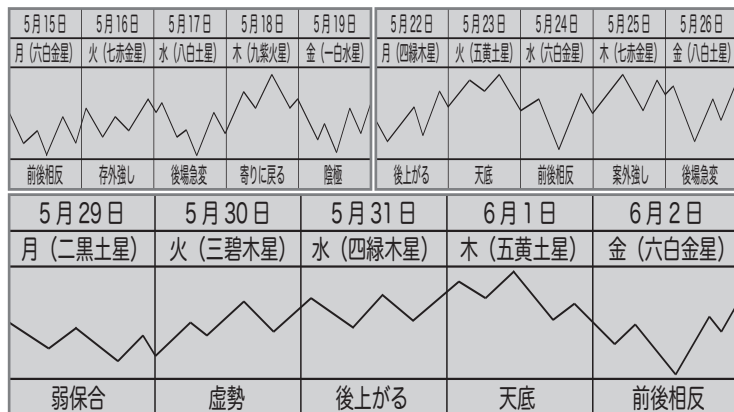
政治的には日本の安倍首相も危機に陥っている。森友学園に続き、加計学園疑惑も噴出。かじ取りが難しくなっている。

こういった政治不安に関してはまだユーロ圏はましと言えよう。ユーロ最強通貨の立ち位置は変わらない。

ユーロドル相場は長期では2015年3月以来のボックス底練

数年ぶりに、欧州通貨クロスと欧州通貨対円がマーケットの中心になっていると感じます。

さて、九星高下伝は6月5日から月盤は《四緑木星》に入ります。波動逆転が続いているのならば、想定外の円高に注意、ということになるかもしれません。



少なくとも2000年代になるまでは想像が出来なかったといってもよかつただろう。

いや、むしろ経済成長が著しいのは東南アジアなどの諸国であり、しかし、ブームといえるような危険な経済構造が一部で懸念されていたほどだった。

アジア経済が実質的に崩壊を迎えるアジア通貨危機は、そうした経済構造の矛盾が一気に露呈した事件であった。

しかし上野が苦しんでいる1994年という状況は、そうしたアジアへの投資は最も安全な投資である、とすらされていた。

そうしたアジアへの浮かれたブームを脇目に、上野は古典的分析を深めていった。長期金利が下がり始めて一気に全体の金利が下がるのか。それとも、短期金利の上昇が限界を迎えてしまうのか。ボルカー議長時代の最後の如く、爆発的短期金利の上昇と崩壊によってそのような劇的な上昇が生まれるのか。

どうなるかによって、短期的な相場、およびその戦略は全く違ってしまふのだ。

りを終えれば、大相場に発展する可能性を秘めている。ボックスの上限は1.15～1.17。このレンジ上限を突破すれば少なくとも2014年の急落幅の半値から62%は取り戻すことが予想される。それは1.2150～1.2600レベル。リスクリードを考えれば、ユーロドルの長期的な買いは4月21～24日のギャップを埋めて引けるまでは有利と見る。

ドル円相場は先週のコメント参照「今週前半はまだショック安の余韻が残されるかもしれないが、今週以降、健全な上昇が再開されると見る。112円以上で引けてくればその確認となる。その前に4月21～24日の週間ギャップ109.40～55を引け値で埋められると厳しくなる。買いのストップは日足引け値でこのマド埋めに設定しておきたい。もし110円割れがあっても、週の引け値で110円以上に戻れば強力な強気トリガーになる。要は、ショック安に買い向かえである」。

18日安値に対するダブルボトムまでは覚悟したい。ストップは同様に設定。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第41回】CRB指数のサイクルについて（4）

前回、2016年1月の安値154.85から16カ月目にあたる5月5日の安値176.68をもって16カ月サイクル（13～19カ月）がボトムをつけた可能性を示唆しました。当然、5月安値を割り込まない限りこの見方は有効。割り込むと無効になります。

週足レベルで16カ月は約70週。サイクルは通常2分割か3分割されるので、2011年12月16日の293.5から2016年1月20日の安値154.85までの日柄を数えてみると、最長で28週、最短で20週、平均で23週のサイクルが確認できました。従って、この23週（レンジ：20～28週）サイクルが、この相場のプライマリーサイクル（PC）であると考えます。

ここから昨年8月2日の176.67までは28週。ただ、ここからのサイクルがハッキリしません。ここから昨年11月14日の178.94までは15週。そこから5月5日安値までは24週。この見方だと真ん中のPCが短縮した事になります。

また昨年8月安値から3月14日の181.55までの32週延長PCをつけ、そこから7週目に5月安値をつけたと見る事も出来ます。ただこの見方だと5月安値はPC内のサブサイクルボトムに過ぎないという事になり、PCの起点は既に割り込んでいる事から、戻しても安値指向は変わらず、現行PCのボトムは早くても秋口以降という見方になります。

恐らく、目先の相場で5月高値を更新したら前者、5月安値を更新したら後者の見方になるものと思われれます。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

トラインがいっぱい

アストロロジー面から見た先週について当欄では「…相場の転換ポイントになりそうなポイントは25～26日の新月（太陽と月のコンジャンクション）くらいしかなくインパクトは弱い」と述べた。実際、先週のドル円相場や日経平均株価は小動き。一方、NY金は週の高値を26日につける。新月の影響があったとすればNY原油か。相場は25日に週の高値をつけて反落。翌26日に週の安値を記録した。

今週は29日に火星と土星がオポジション（180度）の関係になるが、短期的な節目となる可能性はあるものの大きな転換ポイントになる印象は薄い。やはり今週は先週と同様、週末に比較的重要度の高い天体位相が重なる。

先週の新月が相場に影響を与えていた場合、米国時間1日（日本時間2日）の上弦も注意しておく必要がある。先週の流れから反転していれば節目となり、流れを受け継いでいけばそこが一つの終着点になる。

先述の通り前後の時間帯にも注目。5月31日は水星と冥王星が6月1～2日にかけては金星と土星がそれぞれトライン（120度）の関係になる。6月3日は金星・天王星コンジャンクション（0度）。同日（日本時間では翌日）太陽と木星がトライン。

以前も指摘したように、トラインは惑星間の良好な関係を表すのだが、相場に当てはめると“ピーク”、即ち相場の天井と関連性が高い。加えて、米国時間2日は5月の米雇用統計の発表日なので、先週のOPEC総会終了後のNY原油のような「噂で買われて事実で売られる」ような相場展開が、別の市場でも出現するかも知れない。少なくともそのような状態とこれらのトライン集中発生場面は親和性が高いように思われる。日経平均やユーロドル、NY金相場がこの付近まで上げ続けていた場合は注意しておいた方が良いと思われる。

なお、その翌週については先週次の通り述べた「6月4日（日本時間5日）に火星が、同月6日に金星がサインチェンジする。またその3日後の6月9日に木星逆行開始。…次の節目になるポイントは6月第2週になるのではないかな」。この見方に変更はない。恐らく今週末と来週頭が星回りの強いポイントになる。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 5月29日（月） 平和的なムード
- 5月30日（火） マド開けの市場は翌日閉める
- 5月31日（水） トレンド無し、保合いに終始
- 6月1日（木） 急激な動きが出やすい
- 6月2日（金） 雇用統計の反応一時的
- 6月3日（土） 相場は強弱定まるより張り方を研究せよ
- 6月4日（日） 相場には目に見えない天のルールがある

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）

FORECASTS 2017

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円（税込・送料別）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問い合わせ：投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11 GRANDE 人形町 6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444